

序

動物界には敵から身を守るために、あるいは獲物に気付かれずに攻撃するために自分の外見を他のものに似せて自らの存在を隠したり、目立つようにしたりする擬態という現象がある。人間も、野戦では迷彩をほどこした戦闘服を着るなど身を隠すために極めて素朴な擬態を使う。一方、日常生活の中でもさまざまな擬態が見られる。例えば目立たないための擬態として猫被りなどがあり、より一般的には世を忍ぶ仮の姿といったものもある。他に知られると不利になる恐れのある場合に正体を隠して周囲に順化するわけである。逆に目立つための擬態としては大石内蔵助の茶屋遊びなどが具体例にあげられる。もっとも人間は誰でも常に素顔で歩き、本心を語り、裸で行動しているわけでもない。余所行きの顔もあれば、本音と異なる建前もあり、衣冠が社会的に意味を持つことも多いのである。これらを状況に応じて使いわけることによって、無用な摩擦を避け円滑にことが運べることを人間は経験的に知っているからである。こう考えると人が礼儀作法を守り、規律に従うのも社会秩序を成り立たせるための生活の知恵ではあるが、一種の擬態と言えるのかも知れない。

このように擬態が習慣として成立し、お互いにそれ以上の真意を問う必要のない範囲にとどまっているならばよいが、擬態が余り日常化すると混乱を招くことになる。人前で発言すべき内容が無いために押し黙って大物を装う擬態は罪がないが、いかにも内容がありそうに派手に振る舞われる擬態は、はた迷惑というものである。

研究は分からないことを分かるようにする行為だから、他から見ればなおさら何をしているか分からないことも多い。しかし研究の成果は他に理解されねば活用されず、特に企業における研究ではそれが大切となる。そこで往々にして、他人に分かってもらうことだけが研究の目的になって、分かりやすいことだけを研究対象とするようになったり、分からなくても成果を誇張して発表したりするようになる。これは研究者としては目立つための擬態である。一方、研究には他に分かってもらえることにだけ喜びがあるわけではない。他にはどうしても分かてもらえない所にこそ価値を見いだしたりする。その時、研究者の心境は観音像をマリア像にみだてて拝んだ隠れキリシタンに見る擬態のそれに近い。

1992年10月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦